

## エレミヤ書42-43章7節 「自分の考えと正反対の御心」

### 1A 御心を求めるユダの民 1-6

### 2A 御心を示す預言者 7-22

#### 1B 思い直された神 7-12

#### 2B 決心した者たち 13-18

#### 3B 迷った心 19-22

### 3A 御心に聞き従わない民 1-7

## 本文

エレミヤ書 42 章を開いてください。1-6 節をお読みします。

### 1A 御心を求めるユダの民 1-6

42:1 すべての将校たち、カレアハの子ヨハナン、ホシャの子イザヌヤ、および身分の低い者も高い者もみな、寄って来て、42:2 預言者エレミヤに言った。「どうぞ、私たちの願いを聞いてください。私たちのため、この残った者みなのために、あなたの神、主に、祈ってください。ご覧のとおり、私たちは多くの者の中からごくわずかだけ残ったのです。42:3 あなたの神、主が、私たちの歩むべき道と、なすべきことを私たちに教えてくださいますように。」42:4 そこで、預言者エレミヤは彼らに言った。「承知しました。今、私は、あなたがたのことばのとおり、あなたがたの神、主に祈り、主があなたがたに答えられることはみな、あなたがたに告げましょう。何事も、あなたがたに隠しません。」42:5 彼らはエレミヤに言った。「主が私たちの間で真実な確かな証人でありますように。私たちは、すべてあなたの神、主が私たちのためにあなたを送って告げられることばのとおり、必ず行ないます。42:6 私たちは良くて悪くても、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。私たちが私たちの神、主の御声に聞き従ってしあわせを得るためです。」

「主が、私たちの歩むべき道と、なすべきことを私たちに教えてくださいますように」という言葉、私たちがしばしば、「御心を教えてください」という祈りと同じ願いであります。そして話の続きを読めば分かりますが、彼らがそのようにエレミヤにお願いしたにも関わらず、エレミヤから与えられた神の御心は彼らが行おうとしていたことと正反対のことを話しました。今朝は、「御心を知る」ことについて学びたいと思いますが、その御心が自分の考えと正反対であればどうするのか？ということについて見ていきたいと思っています。

このエレミヤ書を学んだ時に、ある聖書教師の話をいつも思い出します。彼は、アメリカ人でヒッピー時代に救われた人です。イエス様を信じて、ただただこの方を愛して、熱くなっていました。彼には、まだ定職はありませんでした。仕事が必要です。そこで祈りました。「主よ、どうか仕事をお与えください。」すると、アルバイトが与えられました。そこは、鶏を加工する工場です。ベルトコン

ベアで流れてくる鶏の頭をちよんぎっていただくだけの作業を一日中行うという作業です。確か、たった三日間でその仕事を辞めました！

私たちは、「主よ、これこれを行ってください。」とお願いします。けれども、その祈りを神は聞いてくださったのに、自分自身がそのことを拒んでしまいます。つまり、御心を知ること以上に、御心を受け入れる心の備えができていないのです。御心を知ること以上に、御心に聞き従う用意がはるかに大事だ、ということでもあります。

42章にまで至る経緯をご説明します。エレミヤが生きていたのは、南ユダ王国の末期です。ヒゼキヤに次ぐ第二の宗教改革者ヨシヤがいた時から預言を始めて、その後の、エホアハズ、エホヤキム、エホヤキン、ゼデキヤのすべての王に関わりました。ユダヤ人のバビロンへの捕囚は三つの段階がありましたが、そのすべてを彼は目撃しました。

ウジヤからヒゼキヤ王に至るまでのイザヤの預言とは異なり、エレミヤのそれは敵から救われるというものではありませんでした。むしろその逆でした。バビロンに服しなさい、という御言葉でした。エレミヤを召し出す時に、主はこう言われました。「見よ。わたしは、きょう、あなたを諸国の民と王国の上に任命し、あるいは引き抜き、あるいは引き倒し、あるいは滅ぼし、あるいはこわし、あるいは建て、また植えさせる。(1:10)」主は、ユダがその悪から離れないので、バビロンによってそれを約束の地から引き抜くことを御心としておられました。けれども、それは彼らが滅びるために行うのではなく、また植えるために行われます。ユダを新しくするために、古いものを壊すのです。

けれども、だれがバビロンに屈しなさい、という宣言を受け入れるでしょうか？ユダを愛するならば、バビロンから救われることが当然ながら願うべきではないでしょうか？ということで、エレミヤはとてつもない圧迫と迫害を受けます。それは、国を治める王だけでなく、バビロンから救われることが神の御心であると教える偽預言者との確執でありました。ユダの人々によって、バビロンに降伏するというのは、自分の考えと正反対の御心だったのです。

しかし、ユダをまことに愛しているのはどちらでしょうか？エレミヤです。エレミヤこそ、真の愛国者でした。彼は神の怒りの預言を行っていましたが、顔は泣きじゃくっていました。おそらく彼の目がしらはいつも腫れぼたくなっていたのではないかと思います。そして、バビロンが滅んだ後も彼は、バビロンに行けば良い暮らしができるものを、残された貧民といっしょにいることを選びました。そして、これからエジプトに下るユダヤ人たちに引っ張られるようにして、いっしょに下って行きました。そこでも、エジプトにおいて彼らが滅びることを預言していったのです。最後の最後まで、彼らと共にいたのはエレミヤでした。

これは絶対に御心ではないと、私たちは思うようなことで御心としておられるものがあります。人を滅ぼすようである、実は救い出す働きがあります。まさに十字架というのがその働きです。信じ

ない者たちは、「お前が救い主なら、自分を救ってみろ」と叫びました。けれども、イエスの横にいた犯罪人は、「御国の座にお着きの時は、わたしのことを覚えてください。」と祈りました。イエスの十字架が、この方の身を亡ぼすようで、実は罪からの救いを与える源だったのです。ちょうど、バビロンによってユダが滅びるように、私たちは罪に対して死んだ者であることを認めなければいけません。そして、バビロンに滅ぼされてから再生が始まるように、罪に対して死んだ者が初めて、キリストともに生きることができるのです。

そこで、42章の話に至る経緯に戻りますが、バビロンによってエルサレムとその宮は破壊され、ユダヤ人はバビロンに捕え移されていきました。けれども、わずかに貧民などユダヤ人たちが残りました。農耕をしないと、土地が荒れ果てたままになり使い物にならなくなるからです。そして、バビロンは、ゲダルヤというユダヤ人を彼らの総督に立てました。ゲダルヤは、その祖父がヨシヤの書記でありました。そして彼の父は、エレミヤが殺されそうになるところを助けるなど、エレミヤの預言を信じていた人でした。ですから、ゲダルヤもバビロンの王に仕えることによって、幸せになることができるのだ、ということが分かっている人でした。

ところが、王族でイシュマエルという人がいました。彼は、アラムの王と手を組み、ゲダルヤを暗殺する陰謀を企てます。これが、ゲダルヤに付いている將軍ヨハナンの知るところとなりました。ヨハナンはゲダルヤに警告し、内密にイシュマエルを殺すこともできると提案したのですが、ゲダルヤは信ぜず、むしろそんな悪意を持つとは何事だ、と怒ったのです。しかし、イシュマエルはゲダルヤを暗殺しました。そして彼は、巡礼の旅路にいたユダヤ人を虐殺しました。そして他のユダヤ人たちを捕えました。

ところがヨハナンは部下を連れて、イシュマエルと戦うために出でいきました。ヨハナンを見たユダヤ人たちはみな喜んで、身を翻してヨハナンのほうに付きました。それで、イシュマエルはアモン人のところに帰っていきました。

そしてヨハナンたちは、ユダヤ人たちをエジプトに連れていこうとしました。同族のイシュマエルがバビロンの総督ゲダルヤを殺したのですから、自分たちにも怒って殺すに違いない、と思ったのです。41章 16-18節を読んでみましょう。「カレアハの子ヨハナンと、彼とともにいたすべての将校は、ネタヌヤの子イシュマエルがアヒカムの子ゲダルヤを打ち殺して後、ミツパから、ネタヌヤの子イシュマエルから取り返したすべての残りの民、すなわちギブオンから連れ帰った勇士たち、戦士たち、女たち、子どもたち、および宦官たちを連れて、エジプトに行こうとして、ベツレヘムのかたわらにあるゲルテ・キムナムへ行って、そこにとどまった。それは、バビロンの王がこの国の総督としたアヒカムの子ゲダルヤをネタヌヤの子イシュマエルが打ち殺したので、カルデヤ人を恐れて、彼らから逃げるためであった。」

そして先ほど読んだ、エレミヤに対する祈り要請になるのです。「あなたの神、主が、私たちの歩

むべき道と、なすべきことを私たちに教えてくださいますように。」と要請しています。そして、エレミヤも、「主があなたがたに答えられることはみな、あなたがたに告げましょう。何事も、あなたがたに隠しません。」と答えています。彼らに不都合なことがあっても、それでも告げますと言っているのです。そして彼らは、「私たちは、すべてあなたの神、主が私たちのためにあなたを送って告げられることばのとおり、必ず行ないます。私たちは良くても悪くても、あなたを遣わされた私たちの神、主の御声に聞き従います。」と断言しています。

## **2A 御心を示す預言者 7-22**

けれども、これが真実の告白なのか？主が試されます。

### **1B 思い直された神 7-12**

42:7 十日の後、主のことばがエレミヤにあった。42:8 彼はカレアハの子ヨハナンと、彼とともにいるすべての将校と、身分の低い者や高い者をみな呼び寄せて、42:9 彼らに言った。「あなたがたが私を遣わして、あなたがたの願いを御前に述べさせたイスラエルの神、主は、こう仰せられる。42:10 『もし、あなたがたがこの国にとどまるなら、わたしはあなたがたを建てて、倒さず、あなたがたを植えて、引き抜かない。わたしはあなたがたに下したあのわざわいを思い直したからだ。42:11 あなたがたが恐れているバビロンの王を恐れるな。彼をこわがるな。…主の御告げ。…わたしはあなたがたとともにいて、彼の手からあなたがたを救い、彼の手からあなたがたを救い出すからだ。42:12 わたしがあなたがたにあわれみを施すので、彼は、あなたがたをあわれみ、あなたがたをあなたがたの土地に帰らせる。』

主からの答えがあるまで、「十日」経ったとあります。十という数字は聖書の中で「試す」ことを表す言葉としてしばしば登場します。ダニエルは、十日の間、野菜だけを食べさせて私たちに試してください、と言いました(ダニエル 1:12)。スミルナの教会の人々は、牢に入って十日間、苦しみを受けると主は言われました(黙示 2:10)。この十日の間に彼らがしなければいけなかったのは、心の準備です。自分たちはエジプトに下りたいという強いと焦りがあります。けれども、そこで辛抱して立ち止まって、主を待ち望むべきでした。ある牧師がこのように言ったそうです。「*祈りの95パーセントは、主が示される御心を自分が行なうことができる心の準備である。*」

そして、主の御心が示されました。それは、「主が思い直した」という言葉です。主は、エレミヤを通してバビロンを、そしてネブカデネザルをご自分の僕としてユダに怒りを現すことを語られました。しかし、エルサレムとその宮の破壊、それからユダヤ人が捕え移されたことによって、神はご自分の怒りをそこで完全に現したとみなされました。完全にご自分の怒りを示されたのだからそれ以上の怒りはない、バビロンの支配の中で彼らを憐れみ、幸せにし、そして約束の地に彼らを帰らせると約束されたのです。

ここで私たちが思い出さなければいけないのは、神の怒りが究極の形で、十字架上で現わしてく

ださったということです。「神は、キリスト・イエスを、その血による、また信仰による、なだめの供え物として、公にお示しになりました。それは、ご自身の義を現わすためです。というのは、今までに犯されて来た罪を神の忍耐をもって見のがして来られたからです。それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。(ローマ3:25-26)」なだめの供え物とは、神の幕屋の中で、その至聖所にある贖いの蓋のことです。そこに大祭司が年に一度、血を携え、イスラエルの罪の贖いのために、その蓋のところまで血を振りかけます。神に怒りがそこでなだめられた、満たされたということを意味します。

したがって、神はもうキリストにあって、私たちに祝福することしか考えておられません。バビロンにいて、バビロンに服するユダヤ人たちを幸せにすることだけを考えておられるように、キリストを信じる者を、アブラハムを祝福したように祝福すると決めておられます。

## 2B 決心した者たち 13-18

42:13 しかしあなたがたが、『私たちはこの国にとどまらない。』と言って、あなたがたの神、主の御声を聞かず、42:14 『いや、エジプトの国に行こう。あそこでは戦いに会わず、角笛の音も聞かず、パンにも飢えることがないから、あそこに、私たちは住もう。』と言っているのなら、42:15 今、ユダの残りの者よ、主のことばを聞け。イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『もし、あなたがたがエジプトに行こうと堅く決心し、そこに行って寄留するなら、42:16 あなたがたの恐れている剣が、あのエジプトの国であなたがたに追いつき、あなたがたの心配しているききんが、あのエジプトであなたがたに追いつき、あなたがたはあそこで死のう。42:17 エジプトに行ってそこに寄留しようと決心した者たちはみな、そこで剣とききんと疫病で死に、わたしが彼らに下すわざわいをのがれて生き残る者はいない。』42:18 まことに、イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。『わたしの怒りと憤りが、エルサレムの住民の上に注がれたように、あなたがたがエジプトに行くとき、わたしの憤りはあなたがたの上に注がれ、あなたがたは、のろいと、恐怖と、ののしりと、そしりになり、二度とこの所を見ることができない。』

主の御声は、ユダヤ人が住んでいたミツパに戻ってもバビロンの王はあなたがたを怒らない、あなたは救われる、というものでした。けれども、これまでバビロンの恐ろしい怒りを彼らは見てきました。エルサレムが取り囲まれて、そのバビロン軍の角笛の音も聞いていました。そのトラウマ、後遺症があるので、その恐れから御声に聞き従わないとどうなるのか？ということをお話しています。そしてエジプトに下る理由がここに二つ書いてありますが、一つは恐れです。エジプトはバビロンに屈していない国ですから、そこまで逃げればバビロンの手から免れることができると思いました。もう一つは、安逸です。ユダの荒れ果てた地で開墾して貧しく暮らすよりも、エジプトで豊かに暮らしたいと思いました。しかし主は、「むしろエジプトに行けば、その恐れがやってくる。バビロンがエジプトまでやって来て、あなたがたを襲う。そしてエジプトにおいて飢饉や疫病がある。」と言って警告しておられます。すなわち、自分の命を救おうとする者は、それを失うという、イエス様の言われた言葉です。

なぜ御声に聞き従えないのでしょうか？それは、主が思い直されたという言葉信じられないからです。エレミヤの預言に耳にしっかりと傾けていたのであれば、彼が一貫して、バビロンに服しなさい、そして囚われの身にありながらあなたがたは自分の命を救い、七十年後にはこの地に戻るという幸せを得るのだ、というメッセージであることを知っていたはずです。これが基本にあり、そして今、ベツレヘムの付近にいてこれからエジプトに下るべきかどうかどうかという、具体的な指示は、その一般的な神の御心の具体的に適用にしか過ぎなかったのです。主が幸せにする、と言われているのだから、ゲダルヤを仲間が殺してしまった後でも、ネブカデネザルの怒りから救われるというのが御心であることは、容易に分かります。

神の御心は、普遍的な、あるいは一般的な御心の中に既に現れています。個別の御心は、多くの場合、その一般的、普遍的な真理を適用することによって見出せるものなのです。つまり、いつもから、一般の御心を示している聖書に触れているならば、日ごとに、朝ごとに、主の御言葉に触れて、そして自分にあり方を省みて、自分のあり方を正していくという営みを行っていけば、自ずと、個別の問題や課題が出てきた時に、祈り、そして御心の判断ができるようになるのです。けれども、そのような霊的営みがないと、先行するのは自分の考えです。ヨハナンたちがそうでした。エレミヤは、「決心している」という言葉を繰り返しています。すでにエジプトに下るといふ決心をし、それで御心を求めようとしていたのです。自分の思いや願いが先にあって、それから御心を求めているので、その求めは実は、「自分の考えを認めてほしい。是認してほしい。」ということに他ならないわけです。したがって、御心は違うと言われても、やはり自分のやりたいことをやります。

ところで、ヨハナンたちが陥っていた二つの過ちであり、「恐れ」と「安逸」は信仰生活によって二つの敵です。先ほど話したように、神がキリストにあってご自分の怒りを完全に満たしてくださいました。だからキリストに信頼していこうとする者には、憐れみと祝福しか与えられません。けれども、恐れがあることから十字架のところに来ないでいると、その恐れに囚われることになります。また、楽に暮らしたいと思って十字架のところに来ないと、かえってその生活は苦しくなります。

### 3B 迷った心 19-22

42:19 ユダの残りの者よ。主はあなたがたに『エジプトへ行ってはならない。』と仰せられた。きょう、私あなたがたにあかしたことを、確かに知らなければならない。42:20 あなたがたは迷い出てしまっている。あなたがたは私をあなたがたの神、主のもとに遣わして、『私たちのために、私たちの神、主に祈り、すべて私たちの神、主の仰せられるとおりに、私たちに教えてください。私たちはそれを行いません。』と言ったのだ。42:21 だから、私は、きょう、あなたがたに告げたのに、あなたがたは、あなたがたの神、主の御声を聞かず、すべてそのために主が私をあなたがたに遣わされたことを聞かなかった。42:22 だから今、確かに知れ。あなたがたは、行って寄留したいと思っているその所で、剣とききんと疫病で死ぬことを。」

エレミヤが 18 節まで語って、すでに聞いている彼らの心が露わになったようです。その怒りの表

情に対しておそらく、エレミヤが返答したのでしょう。エレミヤは、「あなたがたは迷い出てしまっている」と言いました。何をもちて迷い出たのでしょうか？それは、自分の心を偽っていることです。もうすでに自分の心で自分のすることを決めていながら、「御心が分からない」と言っている偽りです。自分で自分の心を偽っていることさえ気づきません。これを「迷い出た」と言っています。

私たちはしばしば、「主の御心が分からない」と言います。けれども、本当はその逆を問うべきなのではないかと思えます。それは、神の御心ではなく、「神に対する自分の心が分からない」ということです。例えば、神を愛していると言いながら、兄弟を憎んでいたらどうでしょうか？ヨハネ第一によりますと、彼は自分を偽っていることになります。目に見える兄弟を愛せないなら、目に見えない神は愛することができません(1ヨハネ 4:20)。

### **3A 御心に聞き従わない民 1-7**

43:1 エレミヤはすべての民に、彼らの神、主のことばを語り終えた。それは彼らの神、主が、このすべてのことばをもちて彼を遣わされたものであった。43:2 すると、ホシャヤの子アザルヤと、カレアハの子ヨハナンと、高ぶった人たちはみな、エレミヤに告げて言った。「あなたは偽りを語っている。私たちの神、主は『エジプトに行って寄留してはならない。』と言わせるために、あなたを遣わされたのではない。43:3 ネリヤの子バルクが、あなたをそそのかして私たちに逆らわせ、私たちをカルデヤ人の手に渡して、私たちを死なせ、また、私たちをバビロンへ引いて行かせようとしているのだ。」43:4 カレアハの子ヨハナンと、すべての将校と、すべての民は、「ユダの国にとどまれ。」という主の御声に聞き従わなかった。43:5 そして、カレアハの子ヨハナンと、すべての将校は、散らされていた国々からユダの国に住むために帰っていたユダの残りの者すべてを、43:6 男も女も子どもも、王の娘も、それに、侍従長ネブザルアダンが、シャファンの子アヒカムの子ゲダルヤに託したすべての者、預言者エレミヤと、ネリヤの子バルクをも連れて、43:7 エジプトの国に行った。彼らは主の御声に聞き従わなかったのである。こうして、彼らはタフパヌヘスまで来た。

御声に聞き従いませんでした。御心を求めていたのに、その御心に聞き従う用意はできていませんでした。このようなやり取りはしばしば、カウンセリグの場で起こります。ある本で読んだ実話ですが、教会のある姉妹がある男性のところで、結婚を考えているけれども、牧師の率直な意見を伺いたいとの相談を受けました。牧師は、彼女のためには祈ってきたので、自分の感じていることを率直に話しました。そうしたら、予期せぬことが起こりました。礼拝にもう来なくなったのです。連絡も途絶えしばらく経ちましたが、他の人からその時に何が起こったのかを聞くことができました。牧師に非常に怒ったのだそうです。彼女は相談しに来たつもりですが、自分の決めた男性を牧師に認めてほしいと思っていただけだったのです。

これでは、神の御心を知っても仕方がありません。御心は、知るだけではなく、知ってそれに聞き従うからこそ意味があります。

私はヨハナンの行動を見につけ、彼は人間的にはとても憧れる人です。事前に、イシュマエルの暗殺計画を自分の諜報ネットワークを駆使して事前に知ることができました。そしてゲダルヤが殺される前にイシュマエルを殺すという、先制攻撃も考えていました。まるで現代イスラエルの情報機関モサドのような人物です。そして、ユダヤ人たちをイシュマエルの手から救い出し、そして彼らを守るために引き連れていました。人間的には非常に有能な人物です。

けれども、この有能な頭脳が命取りとなりました。これは人間の知恵なのです。彼には決定的にかけていた資質がありました。信仰です。神の約束を信じる信仰がありませんでした。あるいは、その信仰がきわめて薄かったのです。私たちは学びました、神の知恵は人の知恵を愚かにします。ヨハナンはとても有能でありましたが、自分の知恵に拠り頼んだために、自分自身の心が分からなくなっていました。それは恐れたり、また楽をしたいという思いを制御することができていませんでした。有能な人も、いや有能だからこそ、人の知恵に拠り頼むことによって、このように愚かな行動を取るのです。

けれども、希望があります。というか、神はあきらめておられません。この後の話は読みませんがまとめますと、エレミヤもエジプトに行きました。そして何と、エジプトにおいても彼らに預言をするのです。神は、彼らが聞き従わなくても、預言者エレミヤによって彼らに語ってくださったのです。

ですから私たちは、遅すぎることはありません。たとえ自分の考えで行ってしまったこと、自分の感じたことで決断してしまったことがあっても、その状態から主に叫び求めればよいのです。へりくだりが必要です。自分がそのように、自分の愚かな行動によって今の状態があるのだということを認める勇気が必要です。けれども、そう認めただけであれば、そこから主が良い働きを始めてくださいます。恵みの働きを始めてくださいます。キリスト者を迫害し、暴力をふるったパウロに対して、恵みを注がれたように、自分はとてつもない罪人だけだけれども、その中にあって主が豊かに祝福して下さる働きを始められます。

どうか、聖書をしっかりと学んでください。ただ学ぶのではなく、そこで主から来たことをしっかりと、自分の生活に当てはめてください。信仰によって当てはめるのです。そうすれば主が語られた時に、自分はそれに聞き従う心の用意ができます。自分の考えや判断は、本当に有限であることを知っています。だから、たとえ考えや意見が御言葉と合わなくても、御言葉に聞き従う柔軟な心が与えられます。